

I 資料紹介

青谷上寺地遺跡出土の北陸・近畿北部系土器

湯村功・木井荘太

はじめに

青谷上寺地遺跡は弥生時代前期後葉～古墳時代前期初頭にかけての集落遺跡である。この遺跡は北陸と九州・大陸を結ぶ交易ルートの拠点として発展し、花卉高杯などの木製品をはじめとした高度な加工技術を有していたことが判明している。

現在、青谷かみじち史跡公園では、青谷上寺地遺跡第1次調査で出土した土器の再整理を行っている。その中で、北陸・近畿北部系と思われる土器が確認されたことから、それらを整理・紹介する。

資料紹介

再整理において、青谷上寺地遺跡出土土器の中で北陸・近畿北部系と思われる土器は計40点確認された。これらの土器は、基本的に弥生時代後期以降の層から出土している。器種の内訳は、甕7点、壺14点、高杯16点、器台2点、脚付杯と鉢が1点ずつである。以下、器種ごとに資料を紹介していく。

また、北陸・近畿北部との併行関係についても同時に考えていく。今回、北陸系土器の時期比定は『西念・南新保遺跡Ⅳ』⁽¹⁾、吉岡康暢氏の「北陸弥生土器の編年と画期」⁽²⁾の編年を参考に判断した。近畿北部系土器は高野陽子氏の「丹波地域一擬凹線文系土器の様式と編年」⁽³⁾、石井清司氏の「丹波・丹後地域」⁽⁴⁾の編年を参考に判断した。これら編年の時期区分は表1にまとめている。

また、口縁部形態において頸部上端付近に段や稜を有するものを山陰地方では「複合口縁」、複数の沈線が平行に施されるものを「擬凹線」と表現する。しかし、北陸地方ではこれを「有

表1 北陸・近畿北部の編年対応表

北陸				近畿北部			
時期区分	西念・南新保Ⅳ (1996)	吉岡 (1991)		時期区分	高野 (2006)	石井 (1990)	
中弥生後時代	1期	1 2 3	Ⅳ期	1			IV (新)
後弥生前時代	2期	1 2 3 4	V期	1	三坂神社1式 三坂神社2式 三坂神社3式 大山1式	古段階新段階 古段階新段階	V-1
後弥生後時代	3期	1 2 3 4	Ⅵ期	1	大山2式 大山3式 西谷1式	古段階新段階 古段階新段階 古段階新段階	V-2 V-3
終弥生末時代	4期	1 2 3 4		2	西谷2式 西谷3式	古段階新段階	V-4
前古墳前期	5期	1 2 3 4	古墳Ⅰ 古墳Ⅱ	1 2 1 2	浅後谷南1式 浅後谷南2式 浅後谷南3式		

段口縁」、「平行沈線」と呼称している。今回は、搬入、模倣含めて、北陸（・近畿北部）系土器を取り上げるため、北陸地方で用いられている「有段口縁」、「平行沈線」を使用していく。

甕（図1）

Po.1は甕の口縁部と頸部である。口縁部は有段口縁をなし、端部は外傾して丸く収まる。器壁は厚い。外面には13条の平行沈線が巡る。内面は、口縁部に指頭圧痕が残り、頸部はナデ後ミガキ、胴部は右方向のケズリで仕上げられている。時期としては『西念・南新保遺跡Ⅳ』の3期（以降、西念3期などと表記する）に当たると考える。

Po.2は甕の口縁部と頸部である。口縁部は有段口縁をなし、端部は外傾して丸く収まる。器壁は厚い。口縁外面はクシ描きによる平行沈線が施され、一部にハケメがわずかに残る。頸

部の一部には、クシ状工具による波状文の一部が残る。内面の調整は、口縁部にナデが施され、口縁部下半には指頭圧痕が残る。頸部上半はハケメが確認され、下半には斜め方向のケズリが施される。時期は西念3期と考える。

Po.3 は甕の口縁部から胴部上半である。口縁部は外傾し、端部は丸く収まる。器壁は薄い。頸部との境で肥厚し、段を形成する。口縁部外面には6条の平行沈線が巡る。胴部は肩部の張りが小さく、胴部中位で膨らむ。胴部はハケメ後ナデ、その後に穿突文を肩部に施している。内面は、口縁部上半に指頭圧痕が残り、頸部はヘラミガキ、胴部は左斜め下方向のヘラケズリで仕上げられている。時期は西念3-4期に当たると考える。

Po.4 は甕の口縁部下端から肩部である。口縁部はやや直立気味に立ち上がる。頸部との境では肥厚し、段状の緩やかな稜を形成する。胴部形態は肩部上位で張る。口縁部と頸部外面はヨコナデで調整されている。胴部外面は縦方向のハケメが残り、内面はヘラケズリ後一部ナデで仕上げられている。時期は、浅後谷南2式にあたると考える。

Po.5 は甕の胴部下半から底部までである。胴部外面は斜め方向のタタキで成形されている。内面は、胴部はナデによって仕上げられているが、底部はハケメ工具の痕跡が残る。時期は石井V-4期と考える。

Po.6 は甕の口縁から胴部である。口縁部は短く立ち上がり、端部をつまみ上げている。頸部は強く屈曲する。胴部は球胴形をなしていると思われる。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデで仕上げている。胴部はタタキの後、ハケメで調整を施す。また、胴部上位の内面にはユビオサエの跡も残る。形態や調整において、庄内式の特徴がいくつか見られる。しかし、胎土は砂粒を多少含むが緻密で、焼成後の色調が橙色系であるなど近畿北部系のものと類似していると思われる。そのため、浅後谷南2式（庄内式新相）と考える。

Po.7 は甕である。口縁部は「く」の字状に短く外傾する。口縁端部はナデによりつまみ上げられ、外面には1条の沈線が巡る。体部はやや球胴状をなす。器壁は頸部が厚く、体部はやや薄い。外面の調整はヨコナデで仕上げているが、体部の一部にヘラミガキが見られる。内

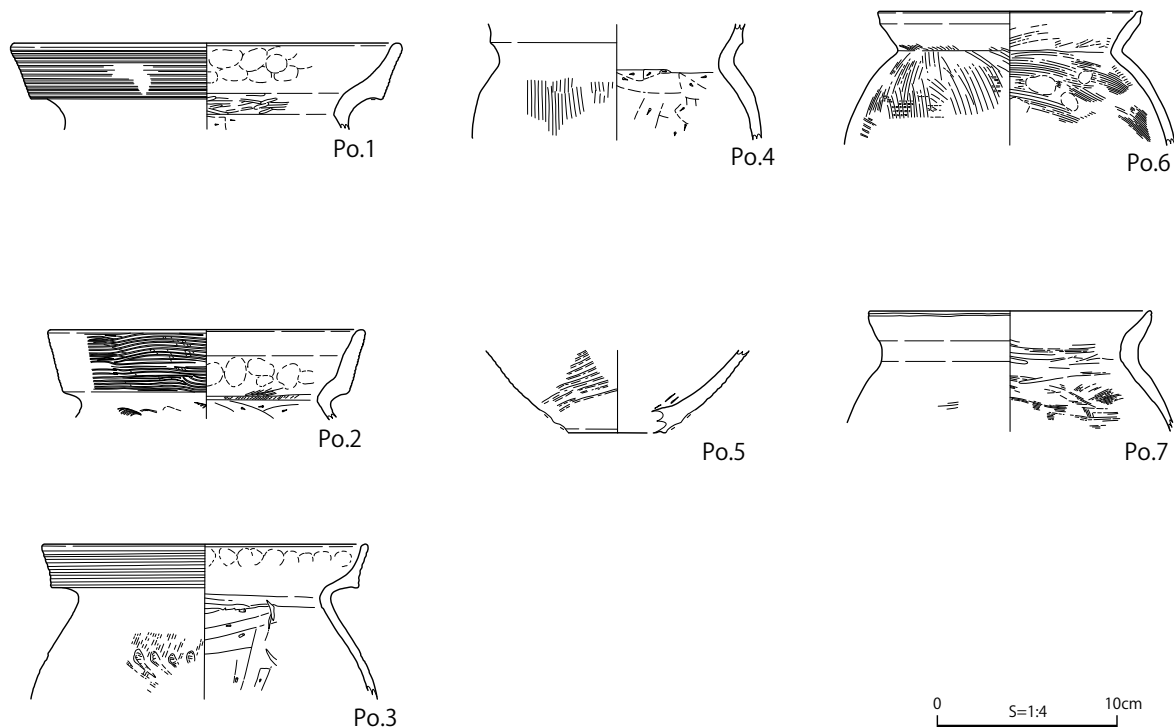


図1 甕実測図

面は口縁部がヨコナデ、頸部はハケメ後ヘラミガキまたはナデ、胴部はハケメ後ナデである。こちらも胎土が橙～赤褐色であり、口縁部に1条の沈線が巡ることから、近畿北部系と思われる。口縁部のつまみ上げや調整で布留式土器の要素も見られるため、浅後谷南3式（布留式併行期）と判断した。

壺（図2）

Po.8は無頸壺の口縁部から肩部である。口縁部はやや直立し面を作る。調整は内外面とも、基本的にナデで仕上げている。ただし、肩部内面には工具による痕も確認されている。時期は西念3期と考える。

Po.9は把手付壺の頸部から胴部である。頸部は口縁に向けて直立し、胴部は扁平で中位で最大径を測る。また、胴部上半には環状把手が貼り付けられている。外面は全体的に赤色顔料で彩色されている。外面の調整はヘラミガキ後部分的にナデが施されている。内面は直立部分がナデ、体部上位はコビオサエ後ナデ、下位にはハケメが見られる。調整や形態的特徴は西念南新保遺跡F区井戸や鯖江市西山4号墳出土の台付把手付埴⁽⁵⁾と類似している。そのため、時期は西念3-4期以降と考える。

Po.10は器種がはっきりとしないが、結合壺と考えられる。残存部位は胴部付近であり、胴部最大径の箇所に扇形のツバが成形されている。ツバ外面には5条のヘラ描きによる平行沈線が施される。また、1つ剥離してしまっているが、2対1組の円形浮文も施されている。外面全体と内面の一部は赤色顔料にて彩色されている。調整は、外面上半が横方向のヘラミガキ、下半が縦方向のヘラミガキ、ツバにもわずかにヘラミガキが確認できる。内面は全体的に横方向のヘラミガキで仕上げている。この土器は器台に載った壺を一体化したものと推測されている。北陸では、弥生時代終末期ごろに壺や鉢と器台を組み合わせた結合壺・鉢が出土しており、Po.10もそれらと同様のものと思われる。その

ため、時期は西念4期～5期頃にあたりと考える。

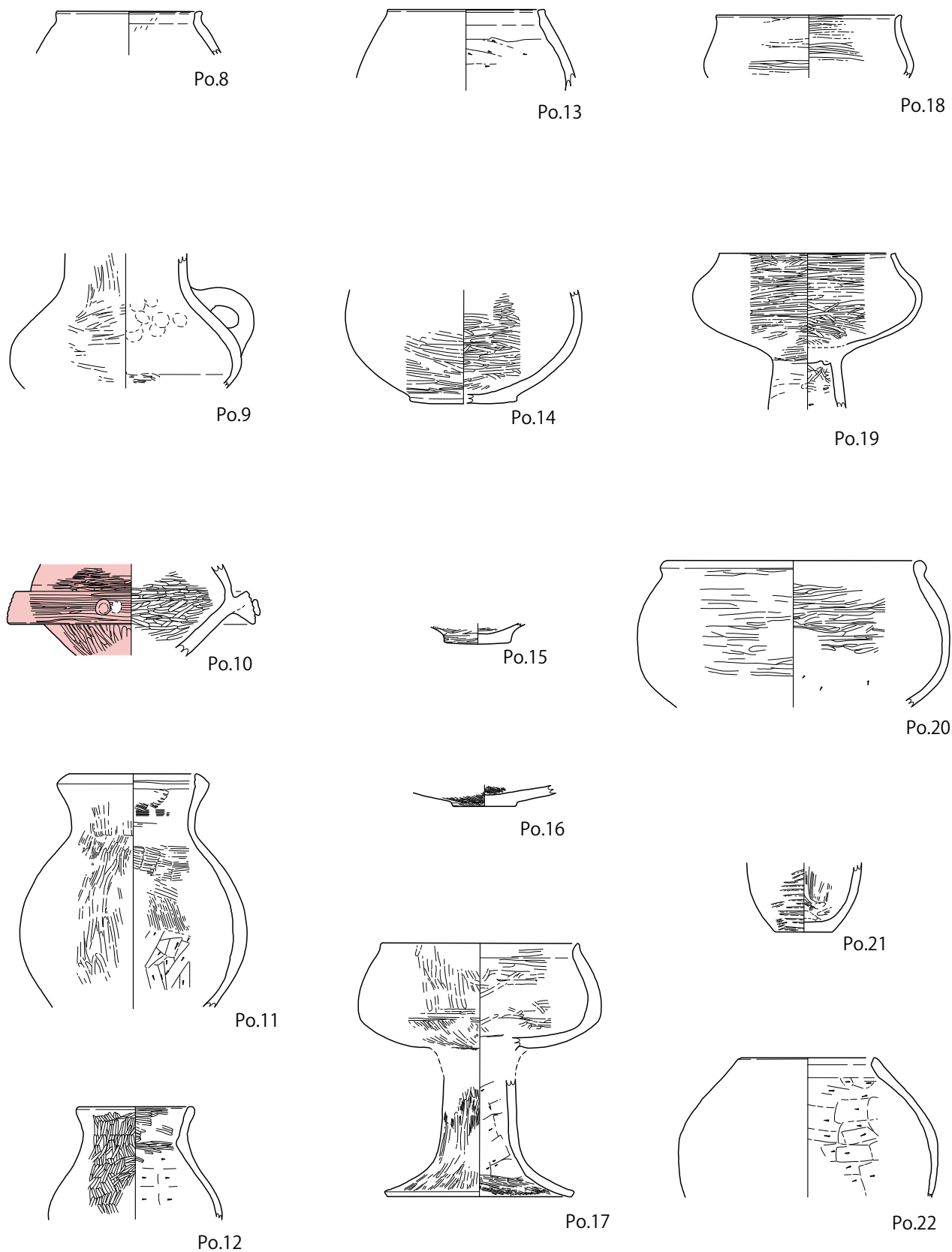
Po.11は壺の口縁部から胴部である。口縁部は頸部から緩やかに外傾し、口縁端部は外面へ三角状に肥厚して面を形成する。口縁部内面は1～2条の沈線が巡る。外面は、口縁部がヨコナデ、頸部がハケメ後ナデ、胴部がハケメ後ヘラミガキ後ナデによって仕上げられている。内面は、口縁部から頸部がハケメ後ナデ、胴部上半がハケメ、胴部下半がヘラケズリで仕上げている。時期は、西念4-2期と考える。

Po.12は壺の口縁部から胴部上半である。口縁部は外傾し、端部は丸く収まる。頸部は緩やかな「く」の字状をなし、屈曲部で肥厚する。器壁は胴部と比べて口縁部がやや厚い。外面は斜め方向のヘラミガキで仕上げられている。内面は口縁部から頸部にかけてヘラミガキ、胴部は右方向のヘラケズリによって仕上げられている。時期は吉岡古墳Ⅱ期と考える。

Po.13は無頸壺の口縁部から胴部上半である。口縁部はヨコナデにより調整されており、内側に面をなす。胴部の調整は、外面はナデ、内面はヘラケズリ後ナデで仕上げている。近畿北部系であり、時期は三坂神社3式～大山1式と考える。

Po.14は壺の胴部下半から底部である。外面は全体的に赤彩されている。胴部は球胴状を呈し、底部は突出した平坦面を持つ。胴部は内外面ともに横方向のヘラミガキ、底部外面はナデ、内面はヘラミガキ後ナデで仕上げられている。胎土から、近畿北部系ではないかと判断した。時期は、大山3式～西谷3式に該当すると考えられる。ただし、Po.15・16よりも底部が広くより安定しているので、それらよりも若干古い時期と思われる。

Po.15は壺の底部である。調整は、胴部外面がヘラミガキ、内面はヘラミガキ後一部ナデ、底部接地面はナデで仕上げている。底部が突出していることから、時期は大山3式～西谷3式に該当すると考える。



0 S=1:4 10cm

図2 壺実測図

Po.16 は壺の底部である。調整は内外面ともに斜め方向のハケメが見られる。胎土から、近畿北部系ではないかと判断した。底部が突出した形状であることから、時期は大山3式～西谷3式に該当すると考える。

Po.17 は無頸壺である。体部と脚部の接合部は欠損しているが、全体形の分かる残りとなっている。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部はつまみ上げて若干外反する。立ち上がり部分の器壁は厚く、立ち上がりの始点である胴部下位で最大径を測る。脚部は、脚柱部は直立し、その後脚端部にかけて外反し、脚端部は面をなす。外面の調整は、胴部がヘラミガキ後ナデで、底部（脚部との接合部付近）でハケメの痕跡が見られる。ヘラミガキは基本的に縦方向であるが胴部最大径付近は横方向となっている。脚部は上半がハケメ後縦方向のヘラミガキ、下半はヘラミガキ後ナデで仕上げている。内面の調整は、胴部がヘラミガキ後ナデ、脚部上中位は右上方向のヘラケズリ、下位はハケメ後ナデで仕上げている。西谷2式古段階と考える。

Po.18 は無頸壺の口縁部から胴部上半である。口縁部はつまみあげにより、端部が外反し、内側に面をなす。胴部は下位で最大径を測り、内傾しながら立ち上がる。調整は基本的に横方向のヘラミガキ後ナデである。近畿北部系であり、西谷2式に併行すると考える。

Po.19 は無頸壺の口縁部から脚柱部上半である。口縁部は内傾している状態からやや外反しながら立ち上がり、端部は面をなす。胴部は扁平な形態であり、中位で最大径を測る。外面は横方向のヘラミガキがされ、脚部はその後ナデで仕上げている。内面は口縁部から胴部が横方向（一部斜め）のヘラミガキ後一部にナデ、脚部はヘラケズリ後粗いヘラミガキで仕上げている。時期は西谷2式と考える。

Po.20 は脚台付無頸壺である。口縁端部は外面が肥厚し、丸く収まる。器壁はやや厚い。外面と内面上半は横方向のヘラミガキ、内面下半はヘラケズリ後ナデによって仕上げられている。

る。時期は浅後谷南2式と考える。

Po.21 は壺と思われる胴部下半～底部である。外面の調整は右上がりのタタキ痕が見られる。内面は体部に工具を使用したナデ、底部に指頭圧痕が見られる。弥生時代後期～終末期の畿内系土器の可能性が考えられる。

Po.22 は無頸壺の口縁部から胴部である。口縁部端部はナデによって内面で面を形成する。調整は、外面はナデ、口縁部内面はヨコナデ、胴部内面は右方向のケズリを施す。この無頸壺は胎土などから、遺跡内で製作された模倣土器の可能性はある。

高坏（図3）

Po.23 は高坏の裾部である。裾部は「ハ」の字状に屈曲して開き、器壁も厚い。脚部は裾部と脚柱部を別々で製作しており、内面には裾部との接合痕が明瞭に残る。脚端部は粘土貼付けにより拡張して、脚端部は面を持つ。調整は、脚柱部との境は横方向のヘラミガキ、裾部上半は縦方向のヘラミガキ、裾部内面はハケメ、端部はナデで仕上げている。時期は吉岡V-1期頃と考える。

Po.24 は高坏の坏部である。坏部中位で直立し、段を作る。その後口縁部が外反して端部は丸く収まり、器壁もやや薄くなっていく。外面はヘラミガキで仕上げているが、坏部下位にハケメが残る。内面は口縁部から坏部中位までが横方向のヘラミガキ、坏部下位から脚部が縦方向のヘラミガキとなっている。形態は『西念・南新保遺跡IV』のAa類⁽⁶⁾に分類できる。そのため、時期は西念2期と考える。

Po.25 は高坏の脚部である。脚裾部中位で肥厚し稜を形成している。段には連続刺突文が施される。稜以下の脚裾部は緩やかに外反し、脚端部は上に拡張して面取りされている。脚裾部中位には円形の穿孔があり、残存部位から4方向に穿孔されていたと推測される。脚端部以外は外面に赤彩がされている。外面の調整は、稜以上はナデ後細いヘラミガキ、稜以下はハケメ

後斜め方向の細いヘラミガキである。内面はナデのみで仕上げられている。時期は西念2期～4期と考える。

Po.26 は高坏の坏部である。坏部は垺型をなし、口縁部は短く外反して端部は面をなし、1条の沈線が巡る。調整は内外面ともに横及び斜め方向のヘラミガキで仕上げている。時期は吉岡V期以降と考える。

Po.27 は有段口縁高坏である。口縁部下端は内外面ともに肥厚し、端部は丸く収まる。外面は5条の平行沈線が巡り、下端部は段をなす。脚部は、上半は直立し器壁も厚いが、下るにつれて外反し、器壁も薄くなる。脚裾部も有段となり、外面に5条の平行沈線が巡る。脚端部は面を取る。外面の調整は、坏部中位がヘラミガキ、下位がハケメ後ヘラミガキ後ナデ、脚柱部はハケメ、脚裾部がヘラミガキで仕上げている。内面は、体部がヘラミガキ、脚部上半がシボリ、下半がヘラケズリ後ヘラミガキで仕上げている。また、口縁端部、脚端部はともにヨコナデである。口縁部、脚部の両方に平行沈線文が施されるものは、西念3-2期の器台に見られるので、同時期のものであると考える。

Po.28 は高坏の坏部である。口縁部は緩やかに外傾し、端部は面をなす。坏部下端で肥厚して稜を形成する。口縁部から稜にかけての器壁は坏部下半よりも厚い。また、内外面ともに赤彩されている。調整はナデ後横及び斜め方向のヘラミガキであるが、坏部下端の稜は調整後に連続刺突文を施している。時期は西念4期頃と考える。

Po.29 は高坏の脚部である。脚柱部は直立するが裾部は緩やかに広がり、脚端部にかけて若干内弯するように膨らんでおさまる。脚端部は内側へ肥厚し下面を持つ。裾部中位には7箇所の円形穿孔が施されている。外面は、脚柱部から穿孔まで縦方向のヘラミガキ、一部ナデ、穿孔から下はヘラミガキ後ヨコナデで調整している。内面は、脚柱部上位はシボリ、中位はナデ、下位はヘラケズリ、裾部はヘラケズリ後ナデで

仕上げている。脚端部は内外ともにヨコナデである。時期は吉岡VI期頃と考える。

Po.30 は高坏の坏部下半から脚部である。坏部は大きく外傾している。脚部は緩やかに外反し、端部は上方に拡張して面を取る。脚部下半の上位には円形の穿孔が4方向に施されている。外面の調整は、坏部から脚部上位にかけて縦方向のヘラケズリ、脚部下位はヨコナデで仕上げている。内面は、坏部がハケメ後ナデ、脚部最上位はシボリ、上中位はナデ、下位はヘラケズリ後ナデと思われる。脚端部はナデによって接地面が整えられている。坏部と脚部は円盤充填法により成形される。形態的特徴から近畿北部系と思われる。時期は石井IV期（新）と考える。

Po.31 は高坏の脚部である。脚柱部は直立し、裾部は「ハ」の字状に開く。器壁も厚くなる。脚端部外面は面をなし、接地面は平坦である。外面は全体的にヘラミガキを施し、端部はその後ナデで仕上げる。内面は脚柱部上半がシボリ、脚端部はハケメで仕上げられている。近畿北部で盛行した技術である、脚内壁最奥部の刺突痕⁽⁷⁾が残っている。時期は三坂神社3式～大山1式と考える。

Po.32 は環状把手付高坏である。この高坏は大山式と呼ばれる、近畿北部独自の形態である。環状把手は粘土貼付けによって取り付けられている。器壁は薄く、内外面ともにハケメ後ヘラミガキで仕上げられてあり、内面には粘土貼付けによるヒビも見られる。時期は大山1式～西谷1式にあたると考える。

Po.33 は高坏の脚部である。脚部は「ハ」の字状に開き、脚端部は上下に肥厚して面をなす。また、裾部の中位には円形の穿孔が施される。外面は横方向のヘラミガキ、内面は左方向のヘラケズリで仕上げている。時期は大山2式と考える。

Po.34 は高坏の脚部である。脚柱部は直立で器壁も厚い。裾部は「ハ」の字状に開き、器壁もやや薄くなる。脚端部は上面にやや肥厚して

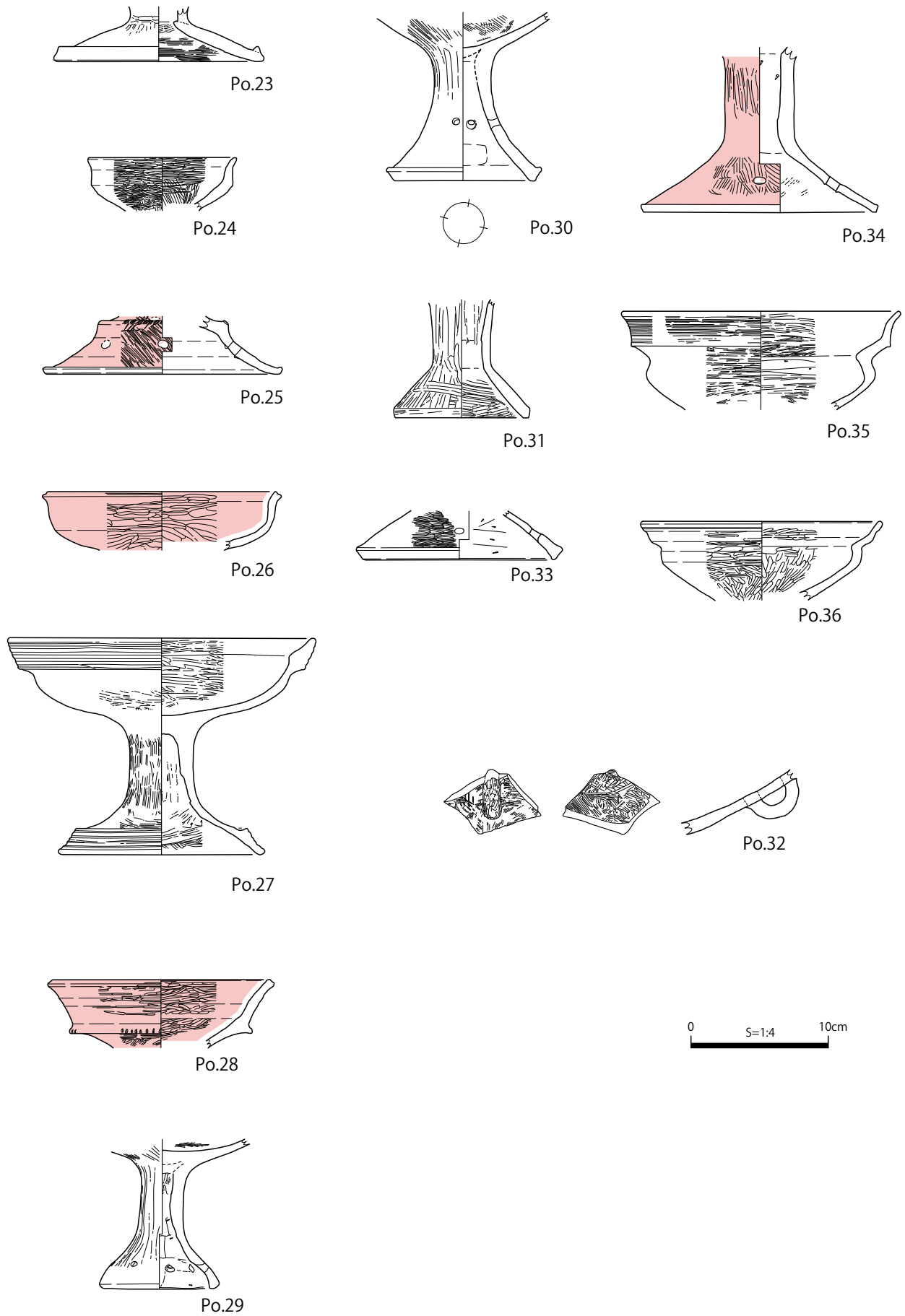


図3 高坏実測図

面を取り、地面と接する箇所は平坦である。また、裾部中位には円形の穿孔が推定4方向されている。外面は端部以外が赤彩される。外面の調整は、脚柱部上中位は縦方向のヘラミガキ、裾部上位はハケメ後ナデ、中下位はハケメ、脚端部はナデである。内面は脚柱部がシボリ後ヘラ状工具によるナデ、裾部がハケメ後ナデである。時期は大山2式～3式と考える。

Po.35は有段口縁高坏の坏部である。口縁部はやや外反し、上端部は丸く収まる。口縁部外面には12条の平行沈線が施される。口縁部から坏部下半にかけて屈曲して段を有す。頸部は器壁が厚い。坏部最大径は上位にて測る。外面の調整は口縁部が平行沈線の後にナデ、頸部から下はヘラミガキで仕上げる。内面は、口縁部から頸部上半にかけてと体部はヘラミガキ、頸部下半はヘラケズリで仕上げている。時期は西谷2式と考える。

Po.36は高坏の坏部である。口縁部はナデによる沈線が1条巡り、端部は丸く収める。また、下端部はやや肥厚し、段を形成する。坏部最大径は上位にて測る。外面の調整は、口縁部と頸部がナデ後ヘラミガキ、体部がハケメ後ヘラミガキである。内面は、口縁部はナデ、口縁部中位にミガキ、頸部から体部はナデ後ヘラミガキである。時期は西谷2式～3式に分類できると考える。

その他器種（図4）

Po.37は器台の口縁部と思われる。外傾しながら広がり、口縁端部は丸みを帯びる。受部は中位で肥厚し、段を形成する。口縁部外面には11条の平行沈線が施され、下位に円形の浮文が取り付けられている。外面の調整は、口縁端部がヘラミガキ、体部下位はハケメ後ヘラミガキである。内面はヘラミガキ後ナデである。時期としては、西念3期にあたると思われる。

Po.38は器台の受部下半から脚柱部である。受部は立ち上がりで外面下に三角状の突帯が巡る。脚柱部はほぼ直立しており、裾部は「ハ」

の字状に開く。脚柱部下半には三角状の突帯が巡る。外面の調整は、体部がナデ、脚柱部がハケメ後ヘラミガキ、脚部突帯がナデ、裾部がヘラミガキによるものである。内面は、体部がヘラミガキ、脚柱部がシボリ後ヘラケズリ、裾部がヘラケズリ後ナデによるものである。受部の形態から吉岡VI-1期、B類変異型に類似しているが、脚柱部と裾部が段ではなく、突帯で分けられている点などで相違がある。

Po.39は脚付坏である。脚部と坏部下半が残存しており、器壁は厚い。短い脚部は「ハ」の字状に開き、端部は面を取る。外面は縦方向のヘラミガキがされ、脚部はその後ナデで仕上げている。内面は体部がヘラミガキ、脚部上半は工具によるオサエ、下半はナデによる調整がみられる。胎土が密で橙系色と、近畿北部系とみられる。時期は西谷3式と考える。

Po.40は鉢の体部上半である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部は丸く収まる。体部は若干内傾しながら底部に向けてすぼむ。体部外面は右上がりのタタキ後ナデやヘラミガキによって仕上げられている。内面はナデによって調整してある。この鉢の胎土は極めて緻密であり、色も赤褐色であることから、近畿北部系の土器と判断した。時期は石井V期と考える。

おわりに

資料紹介ということで、青谷上寺地遺跡から出土した北陸・近畿北部系の土器を取り上げて

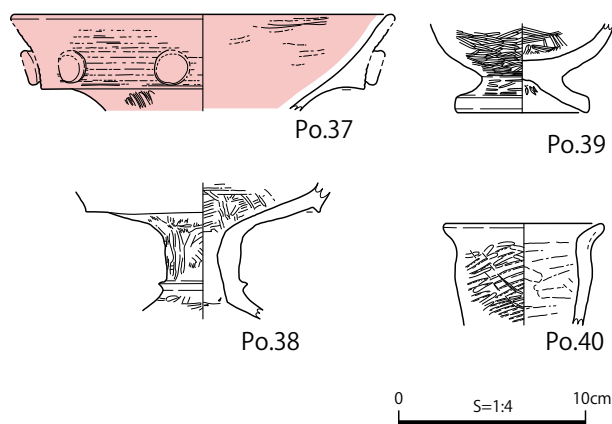


図4 その他器種実測図

きた。これらはあくまで、技法や形態、胎土から北陸・近畿北部系という判断をしたが、一部は当地で製作された可能性もある。

弥生時代後期以降の層からの出土ということもあり、併行関係もおおむね弥生時代後期～終末期に当たるものが大半であった。弥生時代後期～終末期は花卉高杯に代表されるように、青谷上寺地遺跡が北陸方面の関係強化を模索していた時期とされる。今回取り上げた中には、胎土の特徴から判断して、近畿北部地域で製作・搬入されたと思われる土器も多く確認されている。これは、土器そのものが運ばれてきた可能性が高く、人々の往来が当時盛んであったこと

がわかる。

今回は資料紹介ということで踏み込んだ考察ができなかったが、土器の併行関係から他地域との交易や流通の様子を明らかにすることは、今後の課題として検討を続けていきたいと思う。

今回の資料紹介において、北陸・近畿北部系土器かどうかの判断は青谷かみじち史跡公園係長 湯村 功が行い、併行関係の考察、執筆は同公園文化財主事 木井が担当した。

註・参考文献

- (1) 金沢市教育委員会『金沢市文化財紀要 西念・南新保遺跡 4』119 1996年 pp.391-428
- (2) 吉岡 康暢「北陸弥生土器の編年と画期」『人類史叢書 日本海域の土器・陶磁〔古代編〕』9 六興出版 1991年 pp.79-168
- (3) 高野 陽子「丹波地域―擬凹線文系土器の様式と編年―」『丹波地域―擬凹線文系土器の様式と編年―』財団法人大阪府文化財センター 2006年 pp.225-242
- (4) 石井 清司「丹後・丹波地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編1』木耳社 1990年 pp.280-321
- (5) 鯖江市教育委員会『西山古墳群：鯖江市埋蔵文化財調査報告』1987年 p.32
- (6) 口縁部が直立ないし外反し端部が丸く、坏部が浅い形態。かつ、ヘラミガキが横方向のもの。((1) p.393)
- (7) 高野陽子「北近畿における弥生時代後期前半期の土器とその時間列」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001年 pp.108-109

I 資料紹介

表 2 - 1 観察表

挿図 番号	遺物 番号	調査区	取上番号	遺構	層位	器種	法量 (cm)				残存部位 残存率	色調 上段：外面 下段：内面	胎土	備考
							口径	体部 最大径	底径 (脚径)	器高				
1	Po.1	5区	KJA10517		①層	甕	※ 21.6	—	—	△ 4.8	口縁部 1/8	白色～褐灰色 浅黄橙色～黒褐色	普通	内面指頭圧痕
1	Po.2	4区	KJA1072		①層	甕	※ 17.4	—	—	△ 5.0	口縁部 1/8	にぶい橙色	普通 (数か所 黒色のやや大 きな砂を含む)	内面指頭圧痕
1	Po.3	2区	KJB4332		Ⅱ層	甕	※ 17.8	—	—	△ 8.7	口縁部 1/2	灰白色～褐灰色、黒色 橙色～灰褐色、灰白色	密 (4mm以下 の砂礫を含 む、橙色系の 色調)	内面指頭圧痕
1	Po.4	3区	KJB7792		I層	甕	—	—	※ 5.4	△ 4.6	底部 1/8	浅黄橙色 淡橙色	普通	タタキ成形
1	Po.5	4区	KJA3500		②層	甕	※ 14.5	—	—	△ 7.5	口縁部～肩部 1/6	橙、黒褐 にぶい褐、褐灰	普通 (1mm程 度の砂を含む)	内面指頭圧痕
1	Po.6		KJA1865	排水溝 中		甕	—	—	—	△ 6.4	口縁端部、底部欠損 体部 1/8 以下	にぶい橙色～橙色、黒褐色 橙色～にぶい橙色	密 (1～2mm 程度の砂礫を 含む)	
1	Po.7	5区	KJA8414		②層	甕	※ 15.6	—	—	△ 6.7	口縁部～肩部 1/8	橙、黒 明赤褐	普通 (2mm程 度の砂を含む)	
2	Po.8	4区	KJA4315		②層	無頸壺	※ 10.0	—	—	△ 3.1	口縁部、体部細片	にぶい橙色	普通	
2	Po.9	8区	KJA33375	SD38		無頸壺	—	※ 16.2	—	△ 9.6	体部 1/7	明赤褐色 (赤彩)、にぶい黄橙色～ 褐灰色 灰白色、橙色	密 (1～1.5 mm程度の砂礫 を含む)	内面指頭圧痕 環状把手付 小型精製壺
2	Po.10	5区	KJA8478		②層	壺?	—	※ 17.4	—	△ 6.5	胴部 1/8	赤色 (赤彩) にぶい橙色	普通	内面一部に赤 色顔料残る。
2	Po.11	2区	KJB3446		Ⅱ層	広口壺	※ 9.0	※ 16.1	—	△ 16.4	口縁部 1/2、胴部 1/8	橙色～褐灰色、にぶい橙色～褐橙 色 明褐灰色～褐灰色	密 (1～2mm 程度の砂礫を 含む)	
2	Po.12		KJB17933	SD38-2		広口壺	※ 8.0	※ 12.2	—	△ 8.0	口縁部 1/8、胴部 1/7	にぶい橙色～にぶい褐色	普通	内面全体スス 付着 外面一部スス 付着
2	Po.13	4区	KJA4394		②層	無頸壺	※ 11.0	—	—	△ 5.7	体部 1/8 以下	浅黄橙～明褐灰 にぶい橙	普通 (1mm程 度の砂を含む)	
2	Po.14	4区	KJB18161	SD38-2		壺	—	※ 16.6	※ 7.5	△ 8.1	体部 1/3、底部 1/2	明赤褐色 (赤彩)、にぶい赤褐色、 灰黄褐色～黒色、にぶい黄褐色 明褐灰色～にぶい橙色	密 (1～3mm 程度の砂礫を 含む)	底部突出
2	Po.15	5区	KJA8200		①～ ②層	壺	—	—	※ 4.7	△ 1.5	底部完存	灰白～灰 灰白	普通 (微細の 砂を含む)	
2	Po.16		KJB18175	SK173		壺	—	—	※ 4.3	△ 1.5	底部 1/2	灰白色 暗灰色	密 (細砂をわ ずかに含む)	底部突出
2	Po.17	2区	KJB2486		I層	無頸壺	※ 13.7	※ 17.1	※ 12.9	△ 18.0	体部 2/3、脚部ほぼ 完存	灰白色～褐灰色、にぶい橙色～橙 色 浅黄橙色、灰拍色～にぶい黄橙色	密 (1mm程度 の砂を含む)	
2	Po.18	4区	KJA3927	SD11		無頸壺	※ 12.9	※ 14.8	—	△ 4.4	口縁部 1/3	にぶい黄橙、灰黄褐	密 (微細の砂 を少し含む)	
2	Po.19	2区	KJB2858		Ⅱ層	無頸壺	※ 12.4	※ 16.1	—	△ 11.1	体部、脚柱部上半 1/3	黒色、にぶい黄橙色～灰黄褐色、 にぶい橙色～橙色 にぶい橙色～灰褐色	密 (1～2mm 程度の砂礫を 含む)	
2	Po.20	3区	KJB11106			脚台付 無頸壺	※ 17.9	※ 22.2	—	△ 10.3	口縁～胴部 1/3	にぶい橙色	普通 (1～4 mm程度の砂礫 を含む)	
2	Po.21	6区	KJA46009		③層	壺?	—	—	※ 4.0	△ 4.9	胴部 1/6、底部完存	灰白色	普通	内面指頭圧痕 タタキ成形
2	Po.22	2区	KJB779	北側 排水溝		無頸壺	※ 9.4	※ 18.4	—	△ 9.8	口縁部 1/5、胴部 1/4	灰白色～黄灰色 灰白色～黒褐色	密 (1mm以下 の砂を含む)	
3	Po.23	2区	KJB2644	排水溝		高坏	—	—	※ 15.0	△ 4.0	脚部 1/4	にぶい橙色 浅黄橙色、にぶい黄橙色～灰白色	密 (4mm以下 の砂礫を含 む)	
3	Po.24	2区	KJB4452		Ⅱ層	高坏	※ 10.6	※ 10.3	—	△ 3.9	坏部 1/2	橙色	密 (細砂をわ ずかに含む)	
3	Po.25	2区	KJB4032		Ⅱ層	高坏	—	—	※ 16.9	△ 4.2	脚部 1/6	赤色 (赤彩)、灰黄褐色	密 (1mm程度 の砂を含む)	
3	Po.26	3区	KJB11763	東排水 溝		高坏	※ 16.4	※ 17.4	—	△ 4.2	体部 1/6	赤褐 (赤彩)	密	
3	Po.27	2区	KJB3653		Ⅱ層	高坏	※ 21.7	—	※ 14.3	15.9	坏部 1/2、脚部 3/4	にぶい黄褐色～褐灰色	密 (1～1.5 mm程度の砂礫 を含む)	
3	Po.28	2区	KJB3526		Ⅱ層	高坏	※ 15.7	※ 13.3	—	△ 5.0	坏部 1/5	赤色 (赤彩)	普通	
3	Po.29	4区	KJA6158		②～ ③層	高坏	—	—	※ 7.5	△ 10.9	脚部完存	浅黄橙、灰白～黒 灰白、にぶい黄橙	普通 (1mm程 度の砂を含む)	
3	Po.30	2区	KJB2513		I層	高坏	—	—	※ 9.6	△ 12.3	脚部完存	にぶい橙色 灰白色、黒褐色	普通 (2mm未 満の砂をやや 多く含む、2 ～3mm程度の 砂礫を含む)	4方向に円孔
3	Po.31	4区	KJA665		①層、 ③層	高坏	—	—	※ 9.0	△ 8.6	脚部ほぼ完存	にぶい橙色～橙色、にぶい黄褐色 ～明黄褐色 灰白色～にぶい黄褐色	密 (1～3mm 程度の砂礫を 含む)	
3	Po.32	4区	KJB17814	東西ベ ルト内		高坏	—	—	—	△ 4.7	体部破片	にぶい黄褐色～にぶい橙色 にぶい橙色～にぶい黄褐色	密 (3mm以下 の砂礫を含 む)	環状把手付
3	Po.33	2区	KJB1886		I層	高坏	—	—	※ 13.6	△ 3.6	脚端部 1/9	浅黄橙色	普通	円孔

表 2 - 2 観察表

挿図 番号	遺物 番号	調査区	取上番号	遺構	層位	器種	法量 (cm)				残存部位 残存率	色調 上段：外面 下段：内面	胎土	備考
							口径	体部 最大径	底部 (脚径)	器高				
3	Po.34	2区	KJB6941		Ⅱ層	高坏	—	—	※ 16.6	△ 12.0	脚部 1/3	明赤褐色（赤彩）、赤黒色、明褐灰色～褐灰色 黄橙色～黒色	密	円孔
3	Po.35	3区	KJB7789		Ⅰ層	高坏	※ 17.2	※ 16.8	—	△ 5.7	口縁部 1/2	浅黄橙色～灰白色、黒色 灰白色～灰黄褐色、灰白色～浅黄 橙色	密（1～1.5 mm程度の砂礫 を含む）	
3	Po.36	6区	KJA45060		①～ ③層	高坏	※ 17.2	※ 14.6	—	△ 5.7	坏部 1/3	淡赤橙色	密（1mm程度 の砂を含む）	有段口縁
4	Po.37	4区	KJA3388	SD11		器台	※ 20.2	—	—	△ 5.2	口縁部 1/8	赤（赤彩）、にぶい橙 浅黄橙	普通（1mm程 度の砂を含 む）	
4	Po.38	5区	KJA13464		②層	器台	—	—	※ 4.8	△ 7.2	脚柱部完存	灰白色～褐灰色 灰白色～褐灰色、橙色	普通	
4	Po.39	2区	KJB3898		Ⅱ層	脚付坏	—	—	※ 7.0	△ 4.8	坏部下半 1/2、脚部 1/2	橙色	密（1～1.5 mm程度の砂礫 を含む）	
4	Po.40	6区	KJA45343		②層	鉢	※ 8.3	※ 7.3	—	△ 5.5	口縁部、体部 1/3	赤褐	密（礫を含む）	タタキ成形